

大学トップレベル女子バレーボールチームにおける一指導行動に関する省察 — エピソード記述を用いた事例的検討 —

野口将秀¹⁾

Awareness by coaching in a top-level university women's volleyball team: A case study using episode description

Masahide Noguchi¹⁾

Abstract

This practical case study for coaches presents a scientific investigation of a single coaching practice using the qualitative method of episode description, which assesses the background of an episode and the episode itself and draws considerations from the assessment. The subjects belonged to a women's volleyball team that belongs to the first division of the university volleyball federation in which the researcher is involved as a coach. The focus of the observation yielded an episode labeled "What are your aesthetics as a spiker?"

This finding revealed that the researcher, in his role as coach, tend to be blind when faces on the scene of coaching and yielded the consideration that "Repeat inquiry into one's own coaching philosophy and sense of ethical practice is warranted."

Key words: volleyball, episode description, participating observation
バレーボール, エピソード記述, 関与観察

I. 緒言

日々指導実践の只中に身を置き、直接選手たちと関わり、様々な苦悩を抱えながらも試行錯誤を繰り返しながら目の前の現実と向き合ってきた一実践者の洞察には、それがたとえ学術的方法に基づいたものではなかったとしても、コーチング実践上、一定の価値が認められる。たとえば、女子バレーボールのアメリカナショナルチームを指揮した吉田(2004)、水泳の北島康介らを育てた平井(2008)、あるいは女子サッカー日本代表を率いた佐々木(2012)といった実績のある指導者によって著された数多の一般書は、学知とはされていないものの、多くの指導者のコーチング活動に有益な示唆をもたらしてきたと考えられる。それは、「コーチングに関する多様な判断は、科学的研究成果あるいは『コーチ学』的研究によって生まれるものではなく、むしろコーチング実践の過程において産出される」(吉田, 2006, p.10) からである。しかし、実践に

裏づけられたコーチング学を確立するためには、こうした実践知を学術的知見へと高める努力が継続されなければならない。

これまでにも、実際に、多くの指導者が自身のコーチング実践において得た経験知を学術的知見へと昇華させることを試みてきた。技術指導に関しては、スポーツ運動学に依拠した三上(2003)、中村(2013)、さらには岡端(2009)によってなされた学習者の「動感」の地平に寄り添う研究や、「身体的メタ認知」という行為に基づいて学習者自身が自らの動きを言語化することによる学習の促進について検討した諏訪・西山(2009)や石原・諏訪(2011)の研究が挙げられる。また、戦術指導に関しては、ハンドボールにおける戦術指導を事例的に扱った會田・船木(2011)や平岡ほか(2006)、バレーボールにおける戦術指導を事例的に扱った吉田(1996)や米沢・今丸(2014)などが挙げられる。さらに、球技におけるチームづくりに関しては、大学女子ソフトボールのチームマネジメントを事

1) 京都大学大学院人間・環境学研究科
Kyoto University, Graduate School of Human and Environmental Studies

例的に検討した二瓶・桑原(2012)や、大学女子バレーボールにおいて自身が指導するチームの一年間を通した取り組みを反省的に考察した今丸(2010)、公式戦の敗戦に対する自身の指導の省察について論じた箕輪(2010)などの研究が挙げられる。

これらの研究動向は、実践場面を事例的に扱うことによって現場の知を学知へと高めようという志向性が見られることに加えて、スポーツ指導実践者が自らの日々の指導実践に対する「省察」を積み重ねることの重要性を示しているといえよう。そこで本研究では、大学女子バレーボールチームを対象とした著者自身の指導実践を対象としてその省察を行い、コーチング学の考究に寄与する一資料を提供することを目的とした。

なお、本研究では、実践の省察を行なっていくための方法論として「エピソード記述」(鯨岡, 1999, p.11)を用いることとした。エピソード記述とは、発達心理学者である鯨岡が、とりわけ保育の現場を中心として「人と人の接面ではいったい何が起きているのか」(鯨岡, 2013, p.2)という素朴な問いに対する答えを求めるために構築した方法論である。この方法論では、観察者は、行動主義科学とは異なり、無色透明で代替可能な存在であるとは考えられていない。ここでは、「主体として生きる研究者が、自ら人の生きる場に身を挺して、その接面において感じられるもの、得られる気づきをエピソードに描き、あるいは協力者の語りを切り取って、その意味を掘り下げる」(鯨岡, 2013, p.43)というように、観察主体の存在が念頭されているのである。そうしたことからエピソード記述は、現場の体験事象への接近を可能にすると同時に、それらを事後的に俯瞰して考察することを可能にする方法論であると考えられる。

II. 方法

本研究において省察対象として取り上げるコーチング実践が見出されたのは、本研究者がコーチとして指導に携わったA大学女子バレーボール部における20XX年秋季リーグ期間中のことであった。この指導過程を本研究で取り上げたのは、このエピソードがコーチとしての著者自身に意義深い学びをもたらしたからである。

本研究では、エピソード記述(鯨岡, 1999, p.141; 鯨岡, 2005, p.11; 鯨岡, 2013, p.41)を用いて指導過程の記述およびその省察を行った。その際にはまず、

日々の指導実践の中で重要であると考えられるような出来事や雑感などを継続的に書き留め、それらをもとに「背景」をまとめ、チームの軌跡を把握できるようにした。続いて、本研究で「エピソード」として提示する指導過程については、主に指導を行ったその日のうちにその指導に際して交わされたやり取りを記録したが、その際には、指導に臨む自分がどのように考えていたのかといったことや、その折の選手たちの様子などについてもフィールドノートの形で詳細に書き留めた。そして、このようにして得られた資料をもとにして、後日、表現などに留意しながらエピソードを描出した。

なお、現場の生の姿を描き出すエピソード記述に際しては、人権擁護にかかわって十分な配慮を行う必要があることが指摘されている。そこで本研究では、指導省察の一環も兼ね、研究の実施に先立って、予め匿名性の担保を前提に研究協力に対する同意(インフォームド・コンセント)を得た。また、本文中の人物名など、個人が特定される可能性のあるものに関しては、人権擁護の観点から実際の人物名とは関係のない記号で表記するとともに、やり取りの中で不必要であると考えられる表現や発言に関しては慎重に吟味し、適宜修正を加えながら表記した。さらに、当事者には論文掲載の旨を説明し、承諾を得た。

III. 事例の提示

1. 背景

1) チームの状況

本稿でエピソードとして取り上げる出来事があったのは、秋のリーグ戦の最中のことであり、10戦中7戦目を終えた後の練習でのことであった。上位のチームに3連敗を喫したうえ、7戦目で対戦した全敗中の相手に敗れ、チーム全体が鬱屈した思いを抱えていた。優勝を目標に掲げてリーグ戦に臨んだものの、思うような結果が得られず、チームとして壁にぶつかっていた。そうしたチーム状況の中で、選手の大半が共通して問題意識として考えていた要因の一つが、最上級生のまとまりのなさ、であった。特に、キャプテンでありセッター¹⁾であるCと、同じく最上級生のセンタープレーヤー²⁾であるDとの関係が良好ではない、というのが大きな問題であった。最上級生がまとまっていないという問題は、リーグ戦開始以前から幾度も取り沙汰されていた問題ではあったが、解決には至っていなかった。そうしたチームのまとまりのなさを象徴す

るような試合が、7戦目の惨敗であった。最下位のチームに惨敗したことをきっかけに、業を煮やした下級生の一部がその翌日に選手のみミーティングを開くことを提案し、上級生の現状について話し合う場を設けたのであった。

ミーティングを提案した1年生Eからの報告を端的にまとめると、話し合いは行ったものの、問題の解決には至らなかったようであり、その話し合いの内容は具体的には以下のようなものであったということである³⁾。

ミーティングは言いたいことある人が話す、みたいな感じで、自分も思ってること全部話しました。で、Dさんも思ってること言って…それ聞いて、こりゃ負けるわ、って改めて思いました…。Dさんは簡単に言えば、「Cとうちは合わんから喋りたくもなかったし、信用もしてない」って。CさんはDさんの話聞いて、「まあそんな気はしてたけど…でも、信用してないってのはびっくりやわ…。私のこと嫌いでもいいけど、それをチームに影響を出すのはやめて欲しい…。」って言ってました。

そのあと私は、「今のチームは誰かがミスっても自分には関係ないって感じやし、ましてそれを誰かのせいにして…。ひとつのミスを全員でカバーしようとしているように見えないから、チームじゃないって感じで…。実際同じチームだけど、応援する気なくなっちゃいます」って言いました。Dさんに関しても、「どこのチームも勝つために練習してきた試合してなのに、トスが合わんからって入れてるだけじゃ決まるわけもないし、それで勝てるわけもない」って、言いました。でも、その後もDさんは、「合わないから、無理なものは無理」って言ってて…。

こうした報告からうかがえるように、選手ミーティングの結果として、選手同士で本音をぶつけ合うというミーティングを試みたものの、依然としてCとDの関係は解消されておらず、少なくともEの目には後味の悪いままミーティングが終わってしまったように映ったようであった。

ではここで、著者から見たCとDについて、簡単に提示することとする。

2) キャプテンCについて

Cのポジションは、司令塔と呼ばれるほど重要なポ

ジションであるセッターである。このセッターのポジションには、一年生にGという選手がおり、リーグ戦の序盤はGが主に試合に出場していた。しかし、Gが途中で調子を崩したこともあり、リーグ戦中盤からはCがトスを上げるようになった。そうした経緯からも推察されるように、Cはチーム内において、圧倒的な実力で周囲を巻き込み強烈なリーダーシップを発揮するという立場にはいなかったといえるであろう。

そのような立場でキャプテンをつとめるというのはやはり難しさもあり、Dとの話し合いでも、チームをなんとかいい方向に向かわせたいという気持ちがありながらも、なかなかうまくいかないという葛藤を抱えていたようであった。

選手ミーティングの後で、私はCと直接会話を交わしているが、それは以下のような内容のものであった。

私「ミーティングでのこと聞いたけどさ、そんだけDに好き勝手ひどいこと言われてなのに、何で言い返さなかったん？」

C「あーはい…なんかその時はもうすごい気持ちも落ちてましたし、言い返す気力もなかったというか…呆然としちゃって…。とにかく、『チームに影響を出すのはやめて欲しい』って、なんとかそれだけは言いました…。」

私「けどさ、C. そりゃ言いかえさないとだめじゃない？Dだって思ってることあるんでしょ？本音で話し合うって言うてるのに…。そこ遠慮したりとか曖昧なままだったら、結局意味ないんじゃないかな？」

C（少し目に涙をためながら）「はい…そうなんですよね、ほんと、それは分かってるんですけど、すごい…弱くなっちゃったっていうか。…実際、今思い出したらなんか腹立ってきました…。私だってどれだけ気を遣ってトスを上げているか…。そういうの分かって欲しいし…。それに、『信用してない』とかって…。」

私「確かにその言葉とか…まあ俺はDがどんな感じでそれを言ったのかは分からないけどさ、ひどいよなあ。4年間一緒にやってきて、最後のリーグでそれかい、って…。」

Cは決して自分の思っていることを主張できない選手ではないが、この時はDの言葉を聞き、悔しさや悲しさの入り混じった混乱の只中で、「チームに影響を

出すのはやめて欲しい」とだけ、なんとか言葉を絞り出したようであった。1年生のEからの報告である程度ミーティングの様子を聞いてはいたが、上記のやり取りでCから直接様子を聞き、改めて、それではお互いに話し合ったということにならないのではないかと感じたのであった。そうしたこともあり、なぜDに自分の気持ちを伝えなかったのかを尋ねているのが上記の場面である。ミーティングの場は他の選手がいる場でもあったため、自分の想いよりもチームのことを優先しなければ、というCなりの配慮から、自分を抑えて発言していたのかもしれない。しかし、上記のようなやり取りによって再びその時の情景が甦ると、Dの「信用していない」という言葉に、ミーティングの場では押さえていたのであろう憤りややり切れなさといったものが再びこみ上げてくる様子が垣間見られた。いずれにしてもこうしたやり取りからも、チームを良い方向に向かわせたいという想いから開かれた選手ミーティングを経ても、未だ問題は残存しているということがうかがえたのであった。

3) センターDについて

Dはチーム内でも実力があり、常に試合に出続けている選手である。試合ではいつも毅然とした態度で臨んでおり、プライドの高さをうかがわせる選手でもある。普段あまり他の選手と積極的に会話を交わす選手ではなく、寡黙に自分のプレーに集中し、他の選手とも少し距離をとっているような面を持っている。また、Dは思ったことを比較的はっきりと口にする選手であり、リーグ期間中、Cとトスのコンビがうまくいかないことが続いていた時も、監督に対してきっぱりと「Cとはトスが合う気がしません。セッターはG(1年生)がいいんですけど」と、Cにも聞こえるような距離で言い放ち、監督を驚かせるようなこともあった。

そんなDに関して、リーグ戦期間中のプレーを見ていて気になっていたのは、Dのスパイクを打ちに行く態度であった。先の発言にもあったように、「私はCとは合わない」という頑なともいえる態度で、試合の重要な局面でさえも、本気でなんとかコンビを合わせようという意思や気概を感じないようなプレーが続いたのであった。バレーボールでは、お互いの信頼関係やコンビネーションが非常に重要である。センターであるDとセッターであるCは、速攻やAクイックなどと呼ばれる早いテンポのトスを、阿吽の呼吸ともいえる絶妙なタイミングで合わせることが求められ

る関係性にある。それは、お互いの信頼関係が象徴的に反映される、最たるものであるといっても過言ではないであろう。絶妙な呼吸が要求されるそのコンビを合わせるという努力を、一方が相手のせいにして諦めていたのでは、絶対に合うことはないであろう。その意味でも、現在の最上級生がまとまっていないという問題、とりわけCとDの関係性の問題は、このDのスパイクへの態度に集約されているのではないかと著者には考えられていた。すなわちCとDの関係性の問題がプレーに現れてうまくいかず、そうしたプレー上の問題が更にCとDの関係を悪化させるという悪循環があり、またそれをいつまでも解決できない状況が他のチームメイトにも伝染し、チームがなかなかまとまっていけないという悪循環に陥っていた。これが、この時のチームの現状であったと考えられる。もちろん、そうした問題はどちらが先に現れていたのかは分からない。Cのトスがあまりにも悪いがゆえに、Dの努力が徒労に終わったという時期を経た、現在のありようであったのかもしれない。しかし仮にそうであっても、少なくとも現在のDの態度は、決して建設的ではないと著者には考えられていた。

2. エピソード：お前のスパイカーとしての美学は？

上述のような最上級生の問題に関して、監督のBは、何度か個別にDを呼び出して、切々と論じたこともあった。しかし、Dはその場では頷くものの、なかなか態度は変わらなかった。選手同士で話し合いの場を持って解決したいという選手からの申し出に快く賛同し、選手に任せましたが、それらを経てもなかなか問題が収束に向かわない現状に手を焼き、監督も私も、何らかの手を打たなければならないと考えていた。本稿で以下にエピソードとして取り上げるのは、そんな最中の、とある練習でのことである。

この日は監督が途中で練習を抜けるということで、私は残りの1時間弱の練習を任された。常々監督と問題意識を共有していた私は、私なりに何か伝えることが出来ないかと考えていた。第7戦の敗戦をどこことなく引きずるような重苦しいチームの状況を、なんとか一変出来ないかと考えていたのであった。

練習が終わり、最後の集合で、一通りその日のプレーについての総括を言い終えた後、ピンと張り詰めた空気感が漂い、皆がじっと話に耳を傾けている中で、Dと私とのやり取りが始まった。

私「一って感じで、チーム皆でやっぺいこう。」

…で、…なあ、D.] (緊張感のある毅然とした感じ
で)

その瞬間、チーム全体の緊張感が高まるのを感じる。Dにどんなことを言うのか、そのやり取りに、ぐっと注目が高まっていく。

D (少し驚いた様子で) 「…はい。」

私(間があって)「お前の、スパイカーとしての美学ってなんだ？」

D (やや困惑しながら) 「… 美学？って、どういうことですか？」

私「んー…だから、Dがスパイカーとして、大事にしていること、これだけは譲れない、これは自分の中で貫いている、みたいなこと。哲学みたいな。」

D「ああ、はい…。(まだ半分困惑しながらも、やや沈黙があって) …ミスをしたくないこと…です。」

私「うん。どゆこと？もう少しいうと？」

D「(自信なさげに) もう少し？？えーと、なるべく、ミスをしたくないこと…です。ミスをしたくない方が、いいと思うので。」

私「うん、それで？」

(沈黙)

私「試合中、とにかくミスだけはしないように、って？？そんなネガティブにやってるの？」

D「(沈黙) …いや、そういうわけじゃないですけど…。」

(かなり長い沈黙があって)

私「うん。じゃあ、この機会に、俺がリーグ戦中ずっと思ってたこと言うわ。…お前の、スパイクを打ちに行く態度さ。あれ、なんなん？」

D「…。」

私「特に、セッターがGからCに変わってからの試合。俺には、お前が本気で打ちにいったるようには見えない。どう？」

D「(やや控え目ながらもキッパリと、私は悪くない、というニュアンスのこもった感じで) …それは、Cとはトスが合わないの、ミスしないように、と思って、です。」

私「(ここが大切なところだな、とどこかで感じながら) うん、らしいね。ただ俺が言ってるのは、スパイクが合うとか合わないとかじゃなくて、態度のことなんだよ。本気で合わせにいった、それでもどうしても合わない！って感じには見えない。『どーせCとは合わないからなー』って、中途半端なジャ

ンプで入って、合わなくて、『ほら、やっぱりね、Cのトスが悪いでしょ』って言い訳アピールしてるだけのようにしか見えないわけ、俺には。なあ、どう？」

(沈黙)

D「…打ちにいったるってことは…ないです。ただ、もうずっと合わないの。無理、っていうか…。」

私「うん。でもそれは、ただの言い訳じゃない？確かによく見てたら、これは打てなそうだな…ってトスも、何本かあるよ。それは分かる。…分かるけど、そんなこと言い出したら、セッターだって全部完璧な体勢でトス上げてるわけじゃないしさ。それでも、なんとかしようとしてる。前の人のプレーカバーし合うのがバレーボールじゃない？それが見えない、その気持ちが。本気で、『カバーするから持ってきて！』って気持ちで入ってないじゃん。Gの時は、ガンガン打ってた。けど、Cに変わってから、全然打ちにいったる。なんなの？なあ。Gは上手いから全力で打ちに行くけど、Cは下手だからいかないの？ミスしても、一方的にセッターが悪い、みたいな態度してなんも喋らないでさ。そんなんでいいん？それが、チームの最上級生が示すべきバレーなん？試合に出れずに裏方で仕事してる人がどれだけいると思ってるん？H(4回生で、Dと同じセンターのポジション。実力的には劣るが、練習なども手を抜かずに一生懸命頑張っている選手)だって、試合出たんだろうに、ユニフォームも着れずに…、それでも必死に、ベンチで声枯らして応援してるんだよ。下級生だって、ベンチの外で仕事しながら支えてくれてるんだよ。そういう人たちの気持ち、考えたことある？そういう人たちの代表として試合出てるんでしょ？なあ。Hは自分より下手だからそれで当然？Cはトス下手だから本気で打ちにいかなくてもお前は悪くないの？」

(やや間があって)

…なあ、D。今のお前のプレーじゃさ、周りが納得出来ないよ、そんなん。」

D「(沈痛な面持ちで、沈黙) …。」

私「…なあ、D？そういうのさ、哀しくない？お前から4年間同じチームで一生懸命やってきたんでしょ？で、最後のリーグ戦。なあ。このまま、『あいつが下手だから』とか合う合わないとか好き嫌いとか…そんなんです。ほんとにそんなんじゃ終わるつもりなん？もう優勝はないけど…勝つとか負けると

か、そういうのも大事だけどさ。それ以上に、『あぁ良かったなぁ』って、『このメンバーと、皆で力合わせていい試合して、4年間本気で頑張ってきて良かったなぁ』って、『いい仲間に出会えたなぁ』って心から思えるようなさ、そういうバレー、しようや。このメンバーだったら、できると思うよ、俺は。で、そういうことは前から言われていることだと思うし、監督も何度も言ってくれてると思うんだけどさ。けど、聞き流してたら、なんも意味ないから。こうやって俺が強く言ったって、下級生とかがミーティングでいろいろ言ったって、なんも意味ない。別に、周りがDを変えるわけじゃないから。Dを変えられるのは、監督でもなければ周りの選手でもなければ、まして、俺でもないよ。ただ一人、今のお前を変えられるのは、お前自身だと思う。きっと、みんなDに、変わってほしいと思ってると思うよ。…少なくとも俺は、変ってほしいと思ってるしな、うん。」

D「…はい。」

(集合終わり)⁴⁾

この集合での話は、その日のうちに監督に報告した。Dがどのように今日のことを受け止めて生かしてくれるかは分からないが、これをきっかけにいい方向に変わっていくといい、と展望を確認しあった。

その後、数日はDの様子にもギクシャクした感じが残ってはいたものの、徐々にCや周囲のチームメイトとトスやプレーについて話をするようになり、わだかまりが少しづつ消えていくように見えた。リーグ戦もその後、上位との再戦で敗れはしたものの、ストレート負けの前回対戦とは大きく異なり、フルセットの熱戦をチーム一丸となって戦うことができた。直接勝利という結果には結びつかなかったものの、最上級生がまとまりはじめ、引退する時にも集大成として、納得のいく形で終わることができていたようであった。

IV. 考察⁵⁾

さて、ここからは省察によって自らの実践を脱自的に俯瞰していくことにする。

そもそも、今回の問題にかかわって「私」が考えていたのは、チーム内の不満が陰口や愚痴などの形で裏で横行してしまうようなチーム状況になってしまう可能性があるのであれば、その前に、今の問題の本質と思われることを曖昧にせず、むしろ全体の前で明確に

指針を示すことが必要ではないか、ということであった。遠藤ほか(2009)は大学生を対象にしたチームスポーツの集団規範に関して、女子運動部において、集団規範の厳しさには指導者と同様にキャプテンを中心とした上級生が影響していることを指摘しているが、そのようにチームにとって大きな影響力を持つ最上級生の関係が良好ではないという問題は、この時の「私」にとってはとにかく何とかしなければならない非常に切迫した問題として意識されていたのであった。

今回の問題に対して、「私」が全体の前で厳しい口調で言及したのは、この時が初めてであった。それまでもこうしたチーム内の問題は認識していた「私」であったが、あえて全体の前でそのことに触れることをしてこなかったのは、全体の前で言うのに相応しいタイミングと、どうしたらDに伝わるかといったことをずっと模索していたからであった。指導実践現場において「コーチは常に状況判断を迫られている」(北村ほか, 2012)が、チームミーティングを経ても頑なに自分の主張を曲げないDに対して、他のチームメイトの中にも不満が鬱積しかけているこのタイミングは、何らかの働きかけを行う上で適切なのではないかと当時の「私」は判断したのであった。そうした判断に基づいて今回の介入指導は行われたが、ここからは当時の「私」に疑問を投げ掛ける形で、二つの問いを立てて省察を行うこととしたい。

まず、果たして今回エピソードとして取り上げたような場面で、「私」が全体の前でDに対してあのように言及することは、本当に適切であったのか、という問いを立ててみたい。「私」が上述の行動に出るまで、今回の件は「チームとして解決すべき問題である」として、選手たちにある程度任されていた問題であった。幾度となく話し合い、ミーティングが繰り返されてきたなかで依然として解決されずにいた問題であったとはいえ、このままさらに我慢を続けて静観していれば、あるいは別の展開があったかもしれない。選手同士で話し合っ解決するという貴重な機会を、指導者の立場にある私が奪ってしまったという可能性も考えられるのではないかと、ということである。もちろん当時の「私」も、自主自立の必要性は念頭に置いており、チームの内実を可能な限り洞察し総合的に考えたうえで指導的介入を行った。それは、チームにとって、またDにとって最も良い形であるという信憑の下になされた決断であった。しかし、仮にあのまま介入をせず、最終的にCとDの関係性や最上級生のま

とまりが良い方向に向かわなかったとしても、当事者たちがそれらを引退後に振り返って別の形で何らかの学びとしていくのであれば、あるいはそれも一つの自主性の涵養であるといえるのかもしれない。そうした観点は、今、当時の「私」を俯瞰的に省察することを通して見えてきた〈私〉の視点である。大倉(2011)は、日常的に生きている「私」と、その体験世界や内面生活を理解しようとする〈私〉の視点との峻別に基づいて、「私」に対する〈私〉による絶えざる吟味の重要性を指摘しているが、本研究において実践現場の只中にいた「私」を今こうして俯瞰的な〈私〉によって考察することは、非常に重要な意味を持つものであると考えられる。なぜなら、こうして〈私〉が今回の介入に関して振り返ってみることで始めて、当時の「私」は「とにかく最上級生の代がこのままの状態で見送ってしまうのは絶対に良くない」という考え一辺倒で行動を選択し、他の可能性を考えていなかった、ということが〈私〉にとって明らかになっているからである。そうした意味では今回の省察は、いかに現場に臨んでいる「私」が盲目的になりがちであるかを教えてくれるものでもあったといえるのである。

二つ目の問いとして、果たしてDの行動は、本当に問題行動だったのであるのか、という問いを立ててみることにする。そもそも「私」がDにあの集合で訴えかけていたことは、「チーム一人一人が、別の誰かのためにプレーをすることが必要である」、「うまくいかないことを他人のせいにするのではなく、カバーをしようというのがチームスポーツである」、そして「試合に出られずにいる他の選手たちの想いも背負って、コートに立つのが出ている選手の責任である」という言葉で要約できよう。そうした訴えの根底には、これまでの経験の中で「私」に感得されてきた指導観、すなわち「私」にとって重要だと考えられる「正義」とでも呼べるようなある種確信めいた指導観が根底にあった。この指導観は、当時の「私」にとっては確信めいた正しさに裏打ちされており、自身の指導の根幹を支えるものであったといえよう。それゆえ、自信をもって毅然とDに訴えかけたのであった。

しかし、ここで立ち止まって考えてみると、「私」が持っていた「正義」と呼べるような一つの「正しさ」の主張は、一つの「正しさ」の主張である以上、それを主張する際には常に別の誰かの考える「正しさ」を否定してしまう可能性を孕んでいると考えることもできる。今回の事例であれば、「私」の考える「正しさ」に合わないDの行動や言動を、いうなれば

「問題行動」、と捉えたわけであるが、しかし一方でDにはDなりの「正しさ」を貫いていた可能性がある。例えば試合中、思い切って踏み込んでスパイクを打ちにいかないDの行動的側面を、「消極的であり、セッターCへの信頼やチームへの献身を欠いた行動である」と「私」は捉えた。また、チーム内の選手達の大半も、Dの行動を同じように捉えていたようであった。しかし、Dはそうしたトスが合わないという不安要素を抱えた状況の中で、チームに貢献するための精一杯の手段として「ミスをしない」というプレースタイルを選択し、あえて思い切って踏み込まないスパイクの助走をすることで問題を解決しようとしていたとも考えられる。そのように考えた場合、周囲から誤解されながらも、Dなりに、現状から考えられる最善を尽くすというある一つの「正義」を貫いていたとも言えるのである。こうした観点も、〈私〉が振り返って「考察＝メタ観察」をしていく中で浮上した観点であり、当時の「私」にはなかった発想である。

中村(2013)は自身の指導実践に対する厳密な反省分析を繰り返して自らの指導を問い直すことによって実践的な指導理論を構築しようとしているが、自らの実践を厳しく問い直し、本当にその指導や発言は適切であったのかという問いに関して吟味を重ねてゆくことは非常に重要なことだと考えられる。その意味でも、自身の指導をメタ的に俯瞰し、当時の「私」や状況をもう一度吟味していく〈私〉の視点によって、指導者としての指導観や軸となる「正義」などを様々な経験を経て自分の中で構築していくと同時に、それらを法律の条文のように固定化して自分の中でマニュアル化してしまうのではなく、目の前にいる一人一人の選手と向き合い、自らの指導観や「正義」を常に問い直し続けるという姿勢が、指導者にとっては極めて重要なものだと考えられるのである。

V. まとめ

本研究では大学女子バレーボールチームにおけるコーチング実践の中から「お前のスパイカーとしての美学は？」というエピソードを取り上げるとともに、「背景」、「エピソード」、「考察＝メタ観察」からなるエピソード記述を用いて著者自身による指導実践事例の省察を行なった。その結果、いかに現場に臨んでいる「私」が盲目的になりがちであるかということに加えて、目の前にいる一人一人の選手と向き合い、自らの指導観や「正義」を常に問い直し続ける指導者の姿

勢が重要であることが示唆された。

今回の研究は、予め何らかの理論の検証という研究関心を現場に持ち込んだものではなく、あくまでも実際の指導実践の中から切り出されてきたエピソードを提示したものであったこともあり、指導の方法の是非に関する検討を行うことはできなかった。それゆえ今後は、こうした指導実践の事例的提示をさらに積み重ねることで経験の共有を試みるだけでなく、実際の指導行動そのものの是非を多角的に吟味し検討していくことが必要である。加えて、今後は、こうした個々の指導事例における経験の相互関係を整理し、それらがコーチング学という学問全体のどこに位置付けられるのかを明らかにしていくことも求められるであろう。

注記

- 1) 「セッター」とは、スパイカーにトスを上げるポジションのことであり、チームの司令塔の役割を担うポジションでもある。
- 2) 「センター」とは、「ミドルブロッカー」ともいい、「速攻」と呼ばれる、早いテンポのトスを打つポジションのことである。
- 3) 記載の内容は、Eからの直接の報告を要約して示したものである。
- 4) 最後のDの「…はい。」のニュアンスや、私が話している時のチームの他のメンバーたちの話の聞き方、その時現場で流れていた雰囲気や空気感のようなものが読み手に伝わっていなければ、あまり情景は浮かばず、一方的に私が責め立てているだけのよう捉えられてしまうかもしれない。
また、Dに向けて話しながらも、チームとしてどういった姿勢で臨んで欲しいかということをも示したかったねらいがあった。じっと聞き入っているDの様子を見て、何かを感じてくれていることを期待し、何も言わずに集合を終えたのであった。
- 5) ここでは、当該事象の只中にいた当時の私を「私」として示し、そうした「私」から離れてその場のありようやその時の「私」を対象化して考察する私を〈私〉として、それぞれ異なる括弧で括って示した。

文献

- 會田 宏・船木浩斗 (2011) ハンドボールにおけるコーチング活動の実践知に関する質的研究：大学トップレベルのチームを指揮した若手コーチの語りを手がかりに。コーチング学研究, 24 (2) : 107-118.
- 遠藤俊郎・下川浩一・安田 貢・布施 洋・袴田敦士・伊藤潤二 (2009) チームスポーツにおける集団規範：特にバレーボールについて。山梨大学教育学部附属教育実践研究指導

- センター研究紀要, 14 : 84-94.
- 平井伯昌 (2008) 見抜く力。幻冬舎新書101 : 東京.
- 平岡秀雄・田村修治・栗山雅倫 (2006) ハンドボールの戦術に関する事例研究：戦術の変更が攻撃に及ぼす影響。東海大学紀要, 35 : 49-57.
- 今丸好一郎 (2010) チームづくりに関する事例的研究：本学バレーボール部（6人制）の平成19・20年度における活動報告。東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 45 : 107-115.
- 石原 創・諏訪正樹 (2011) 身体的メタ認知を通じた身体技の「指導」手法の開拓。身体知研究会（人工知能学会第2種研究会）SIG-SKL, 09-03 : 19-26.
- 北村勝朗 (2012) トップアスリートを指導するコーチの心理。体育の科学, 62 (8) : 581-585.
- 鯨岡 峻 (1999) 関係発達論の構築。ミネルヴァ書房：京都.
- 鯨岡 峻 (2005) エピソード記述入門：実践と質的研究のために。東京大学出版会：東京.
- 鯨岡 峻 (2013) なぜエピソード記述なのか：「接面」の心理学のために。東京大学出版会：東京.
- 三上 肇 (2003) コツの自覚に関するモルフォロジー的考察。スポーツ運動学研究, 16 : 13-26.
- 箕輪憲吾 (2010) 大学女子バレーボールにおけるゲームの敗因に関する事例的研究。長崎国際大学論叢, 10 : 107-118.
- 中村 剛 (2013) 運動指導における超越論的反省分析の重要性。スポーツ運動学研究, 26 : 13-27.
- 二瓶雄樹・桑原康平 (2012) 団体スポーツにおける個人を活かすチーム・マネジメント：C大学女子ソフトボール部の実践例。スポーツパフォーマンス研究, 4 : 16-25.
- 岡端 隆 (2009) スポーツ運動学における運動観察の方法に関するモルフォロジー的一考察。静岡大学教育学部研究報告（人文・社会科学篇）, 59 : 41-52.
- 大倉得史 (2011) 「語り合い」のアイデンティティ心理学。京都大学学術出版会：京都.
- 佐々木則夫 (2012) なでしこ力 次へ。講談社：東京.
- 諏訪正樹・西山武繁 (2009) アスリートが「身体を考える」ことの意味。身体知研究会（人工知能学会第2種研究会）SIG-SKL, 03-04 : 19-24.
- 米沢利広・今丸好一郎 (2014) バレーボールにおける攻撃戦術に関する事例研究：センター・ライト攻撃で5割の打数と50%の決定率を目指して。福岡大学スポーツ科学研究, 44 (2) : 29-40.
- 吉田敏明 (1996) バレーボールにおけるサーブプレシープフォーメーションの変更に関する研究：5人W型及び4人N型から5人逆W型への移行。スポーツ運動学研究, 9 : 29-41.
- 吉田敏明 (2004) 壁は破れる。：全米女子バレーボール・チーム初の日本人監督。角川書店：東京.
- 吉田敏明 (2006) 「コーチ学」の経緯と展望。びわこ成蹊スポーツ大学紀要, 3 : 7-14.

平成26年6月19日受付
平成27年3月18日受理